

議事要旨

<意見交換（介護人材確保に関する現状について）>

- 感覚的に人手が足りないのは間違いない事実と思いつつも、どこで何がどれぐらい足りないのかという具体的な取り出しが熊本市に限らず全国的にできていないため、ただただ不足するという数字に右往左往している印象。
 - 需要と供給のバランスで考えたときに、事業者数の数が果たして適切なのかという視点を持つ必要がある。介護人材が利用者の数にちゃんとマッチした形になっているのかというのは常々疑念に思うところ。
 - 介護人材の将来推計については、国の算出データに基づいて県も算定しているが、やはり基礎自治体である市町村のところでどういった社会資源を今後維持してキープしていったそれを支える人材がどれぐらい必要なのかというイメージが基礎自治体単位で見えてくることのほうが大事ではないか。
-
- 訪問系はもともと非常勤に依存している構造があり、事業所としても非常勤が欲しいけれども、若い方で非常勤というのはなかなか働きづらいということでマッチしていない現状がある。
 - 高齢の方々は、入院やお亡くなり等で急遽訪問の機会が空いてしまい、報酬が入ってこないという事が多々あるため、事業所の経営上、非常勤を採用したいという現実がある。
 - 総合事業においては、利用者に対するサービスの適正化ができるならば、その人材を本当に必要な方に集中してサービス提供できるというところもある。
 - 今併設型事業所が非常に増加しているが、併設型事業所も施設内だけでなく施設外にもサービスを提供するように熊本市が決めることでもう少し人材が幅広く地域の方に提供できるのではないか。
-
- 今は60代70代の方が働いているが、それがそのまま続くわけではなく、次の世代も50代60代になってきているので、この世代が抜けたあと事業所が継続できるのか、そういった事業所の継続性まで、将来推計の分析では考慮していないので、実際はもっと介護人材は不足するのではないか。もっと危機感を持たないといけない。

<意見交換（熊本市の取り組みについて）>

- 介護職への理解度の向上という点では、特に小さいうちから、介護に慣れ親しむということから学校との連携というのは今後ますます重要になるのではないかな。
- 事業者側としては、今年は介護報酬の改正などがあって、重度化防止などのことをすごく大きく今年打ち出しているが、やはり、介護というものがより専門性の高いものであるということが、学生に伝わっていかなければ、働きたいとは思わないのではないかな。
- 介護の専門性について、小中学生の学生にしっかりと打ち出していければ、介護のイメージが変わり、高度な技術を持った介護福祉士になりたいと思う方々が増えるのではないかな。

- 職場の魅力を一緒にの仲間として伝えられる職員を育成することが、学生の介護に対するイメージ改善や入職した職員への元気づけとして必要ではないかと感じている。

- 何らか働きたいと、役に立ちたいということで生活援助型のヘルパー研修を受けている方々を、実際に現場とつなげるコーディネーターが必要。

- 生活援助型のヘルパー研修については、地域の元気な高齢者ばかりに絞るのではなく、子育て世代や学生など幅広い世代にどう届けるかという、多面的なアプローチについて考えたほうがいい。そういう多面的な入り口のアプローチがあって、実際現場でどれくらい根づいてくれるか、資格取得に結びつくかという話に繋がっていく。

<意見交換（今後の取り組みについて）>

- 職員の子供に両親の働いている姿を見てもらうことを目的に職場体験を実施したことがあるが、職場の雰囲気も良くなり、学生への介護の普及にもつながったので、小学生中学生など対象の拡充を考えてみていいのでは。
- 看護職についての動機の1位は、親が看護師だったというアンケート結果もあり、年齢層を下げて小さいうちから介護が何か憧れる職業として見えるような取組があったほうが良いのではないか。
- 介護職員が現場ならではの目線で学生と話をすると、学生も刺激を受けられるので、我々も介護の魅力をどんどん伝えていけるような力をつけていかないといけない。
- 行政の広報活動等メディアを活用して業界外の人に介護の魅力を発信することが大事。